

平成10年度第4回日本生物物理学会運営委員会議事録

日時：1998年7月4日（土）13：30～17：30

場所：愛知県中小企業センター7階11会議室

出席者：松本会長、郷通・川戸両副会長、桐野編集実行委員長、新田北海道支部
長、鈴木東北支部長、青木・市川・楠見・中村・永山・藤吉・三木各
委員、永田学会事務局秘書、笹沼学会会長室秘書

報告事項：

1. 「生物科学・学会連合」第1回連絡会議報告（川戸） 資料：報1

生物学関連の各学会間の連絡組織として設立された「生物化学・学会連合」の第1回連絡会議の報告。環境ホルモン、クローンなどの科学的トピックスに対して、生物学関連の組織として責任を持ってコメントを出すこと、公務員特種（生物）の合格者を積極的に採用してもらうよう各省庁に働きかけることなどが当面の活動となる旨報告された。また上記団体は学術会議の研連とはなんら関わりを持たない。本学会としては当面活動内容やコメントを注意して見守っていく必要があるとの意見が出た。

2. 生物物理若手の会夏の学校援助金について（松本）

前回運営委員会で決定の通り、上記援助金を今年度より20万円から30万円に増額し振り込み済みであることが報告された。

3. 電子図書館サービスの著作権料についてのアンケート結果（市川）

資料：報3

電子図書館サービスによる会誌の閲覧料金についてのアンケートの結果、1ページあたりの閲覧料を5円、印刷料を10円と設定した旨報告された。また、図書館などの端末からアクセスする場合は、各図書館ごとに機関会員費が1万2千円であることからその2分の1の6千円との料金設定とした。

4. 生物物理学研連委員会（第17期第3回・6月15日）報告（郷通）

平成10年6月15日に第17期第3回生物物理学研連委員会が日本学術会議第7部会議室（6階）にて開催され、以下の様な委員会報告がされた。出席者は郷（信）委員長、

木下、桐野、郷（通）、田之倉、中西、永山、伏見、宝谷、柳田であった。

報告

1. 学術会議関係

1.1. アジア研究に関する団体調査

1.2. 大学等基礎研究施設、設備経費削減の問題

1.3. 第4部付置「分子レベルの構造生物学振興・推進小委員会」設置

日本では、構造生物学の研究予算はゲノムプロジェクトの一部として扱われている。構造生物学研究推進のため、本小委員会をつくった。

1.4. 研連活動報告（アンケートに対する回答）資料が配布され、説明があった。

1.5. 生物科学研連（2月2日の議事録）

生物科学関連学会のゆるやかな連合体を作る提案について発端の一つは、公務員試験の科目に「生物」を作る運動だったが、提案4学会、関連9学会で、ゆるやかな連合（生物科学・学会連合）をつくる動きについて、この生物物理研究連絡委員会で話題になった。2名の委員が、生物物理学会も9学会の1つに入っているはずであり、生物物理学会運営委員会で議論を少ししたような記憶があると述べた。7月4日の生物物理学会運営委員会で議論して、郷（信）委員長に報告してもらうことにした。Gordon Conference に関するアンケート調査が、生物科学研連の活動として行われ、その結果の集約が最近報告されたが、その後をどうするか、という点に関する内田委員長の方針は今のところ不明である。既に Gordon Conference を1つ、湘南国際村で開くことが決まっている。

1.6. 研究集会開催予定アンケート

学術会議がその登録学術団体を対象に行ったこのアンケートに生物物理学会は回答していないようであるので、生物物理学会でどう扱ったのかを調べてもらうことにした。

2. IUPAB 関係報告

2.1. Council Meeting

Dehli Congress は、米国の外国出張旅費が抑制されたのも一因となり、規模は小さくなる見通しである。日本生物物理学会活動紹介の1つとして、共立「ニューバイオフィジクス」シリーズを紹介したところ、高い関心を呼んだ。これの英語版を出す可能性があれば追及すべきであろう。

2.2. Dehli Congress

日本からの招待講演は5名と補欠3名となる予定である。1st circular が出たので、学会誌で宣伝してほしい。

3. 物質構造科学研究所

高エネルギー物理学研究所と東京大学原子核研究所が合併・再編されて、物質構造科学研究所と素粒子研究所となった。定年 60 才を 63 才にすることになった。大型機器を使う他の研究者へのサービスに貢献している研究者が長くいて、滞る面もある。そのような人をうまくローテーションすることを各学界、コミュニティで考えてほしいとの意見が、物質構造科学研究所の運営協議会でも出ている。このようなことは、10 研究所でつくる総研大全般の問題である。たとえば、生理学研究所における MRI、超高圧電子顕微鏡の世話をしている人（助教授級が多い）が、特化、固定化してしまう例があげられる。サポート スタッフの問題は、森脇 総研大副学長が学術会議において提起している。

4. その他

i. クローン動物実験

関連学会が共同で声明（ガイドラインとして）を出す場合には、その 1 つとして生物物理学会も参加することが考えられる。この問題は、本来、研究者が問題を整理して社会に提起すべきもので、研究者社会に閉じているものではない。例えば、「ヒト臓器」の問題が近未来で大きいものになるだろう。しかし、もっと適切な研究連絡委員会があるだろう。結論としては、中西私案で意見が一致できる。郷（信）委員長から第 4 部会に報告することにした。

審議

1. 議事録承認

前回議事録を確認した。

2. International Network of Protein Databases

IUPAB のカOUNシルの資料が配布され、要点を郷（信）委員長が以下のように説明した。データベースは、世界のどこにあってよいが、金がかかるので人件費の安いところで大いにやるようにしたい。それらたくさんのデータベースをウェブを通じてネットワーク化したい。この方針で、活動を活性化するために（多分米国で）資金を用意し、発展途上国に配分して組織化するという提案があって、それに対しコメントを求められたので、金久（IUPAB Bioinformatics Section の日本代表）及び、楠木氏（阪大・日本の Protein Data Bank の責任者）の 2 人にコメントを依頼した。委員から、世界 3 大データバンクの他に、既に小さな研究者のデータベースがあって、ネットワーク化されつつあるのが現状であり、提案の趣旨がよく分からないとのコメントがなされた。趣旨の first sentence から解釈すると、過去 50 年の文献を調査して、電子化しようということだろうとの考えが郷（信）委員長から述べられた。また別の委員が、80% は間違いで、ゴミを集めたものになりかねない、評価を行うべきだが、それはむずかしいとの意見を述べた。DNA デー

データベースでも誤りが多く、使うには元の文献にさかのぼって評価する必要があるとの考えが示された。関連に論文がまとめたデータベースは有用だが、それ以外は無益であるとの考えが述べられた。郷（信）委員長は、データベースは自由にアクセスできるものでなければならない、と以下のようにコメントした。科学の進み方は、どこかでオーガナイズするのでなく、自由に行われて、優れたものが残るのがよい。データの囲い込みにつながる懸念があり、データベースに権利を与えようとしている欧米の動きには注意しておく必要がある。ひとりの委員は、DNA sequence、3-D data of protein は、原著に含まれておらず、データベースにしかないのでアクセスできないと困る、この件は、それ以外の情報で原著に記載されていることを検索するのが便利になる(多分ならないだろうが)というだけという考えを述べた。別の委員は、米国政府の情報支配政策に及んでいるという考えを述べた。郷（信）委員長は、正面から、そのような動きに批判的に対処すると、疎外されるだけに終わる可能性が高く、日本の貢献(情報生産量)は 15%にしかないので危険である、ここに書かれている形になることは必然であると考えられるとコメントした。これに関しては、他の関連する方々の意見も聞いて、IUPAB には郷（信）委員長が返事をすることにした。

3. 4th International Conference on Biological Physics

資料が配布され、伏見委員から 2001 年開催予定だが、学術会議の共催を申請するために現在準備を進めているという説明があった。生物物理学会には既に共催申請し、8 月に物理学会、12 月に学術会議に共催申請をする。物理学会の分科会の再編と合わせ、伏見委員を中心に進めていく。

4. 研究助成のシステムについて

次回和田委員長が出席したときに議論する。

5. 時限付き細目の提案

学術会議を通して申請することになっている。来月が締めきりなので、何か提案があれば申し出てほしい。以前、構造生物学を和田委員長と内田委員長を中心にして申請しようとしたが、取り止めた経緯がある。

5. 平成 10 年度年会開催準備状況について（松本）

資料：報 5

発表申し込みは 6 月 30 日現在で電子メール・郵送併せて 770 件前後。
また年会会場の部屋の割り当て、予稿原稿のとりまとめなどのおおまかな準備スケジュールも報告された。現在のところ思ったよりも予稿集の広告が取れていないことが報告され、会員名簿イエローページとバッティングした部分があったことが説明された。その為の年

会事務局会計の赤字は学会がホローする事が松本会長より説明があった。

6. 平成11年度年会開催準備状況について（市川）

資料：報6

和光市文化会館で平成11年10月3日～6日の日程で開催予定。3日は準備と一般対象者向のイベントを検討中。シンポジウムは大ホール9コマと小ホール6コマの予定。ポスター発表のスペースが不足する可能性があるので、小ホールのシンポジウムを取りやめてポスター会場にしてはどうかとの意見が出されたが、シンポジウムを充実させるという申し合わせに反するとの意見が出て、今後継続審議することとなった。また6日は生化学会年会（横浜）と重なるので、双方でプログラムを調整する予定。

7. 平成11・12年度委員候補者及び平成11年度科研費委員候補者選挙結果報告（市川）

資料：報7

4月20日開票で平成11・12年度委員候補者に決まった112名および平成11年度科研費委員候補者に決まった16名の得票結果が報告された。候補者名は会誌38巻3号の選挙公告BおよびCを参照。また学会委員による科研費第2段審査委員候補者の推薦結果もあわせて報告された。

8. 平成11年度次期会長候補者について（松本）

第3回運営委員会で決定した平成11年度次期会長候補者の一人から了承が得られず候補者が変更となったいきさつが松本会長から説明があった。候補者名は会誌38巻3号の選挙公告Aを参照。

9. 平成9年度会計監査（中村）

平成10年度第3回運営委員会において承認された平成9年度決算に対する会計監査が葛西・京極両監事により行われ、特に問題なく承認された。

10. 賞・助成金選考委員会報告（郷通）

資料：報10

ノバルティス科学振興財団第8回海外学会出席助成に対する本学会からの推薦候補をアンケート調査した結果、工藤卓氏（大工研）を学会からの候補者として推薦した旨報告された。

11. 学会名簿について（市川）

資料：報11

98年度会員名簿に掲載される広告・イエローページ協力企業一覧が配布された。また名簿見本の一部が回覧された。

議題：

1. 学会地方運営について（松本）

資料：議1

北海道・新田、東北・鈴木、九州・太和田の各支部長から、各支部の活動状況について報告があった。北海道支部では毎年1回の例会に加え、今年は「構造生物学」のテーマで分子生物学会、日本生化学会北海道支部および日本生物物理学会北海道支部の3団体の共催による合同シンポジウムを11月に開催する。東北支部では6月に開催された東北支部総会と講演会について報告がされた。

九州支部では若手中心に生物物理関係の新企画で九州地区での活動を再開予定。現在の支部会費の増額について議論があり、財政状況が好調な折、支部独自の活動についての積極的な提案には出来るだけ支援する方向で対応することが確認された。

2. 会誌編集改善について（郷通）

資料：議2

会誌発行において重大なミスがいくつか続いた問題について、津田前々編集実行委員長、美宅前委員長、桐野現委員長らが、実状の調査と原因の分析を行った結果が報告された。これに基づいて議論した結果、原稿閲読、ゲラ校正、及び、刷り上がりの各段階で、担当者が丁寧にチェックすることを徹底させること、最終チェックはリアライズ社と編集実行委員会との分担を明確にすること、また、テスト期間を設け専属の編集実行委員長補佐を外部から雇用する方向で調整することなどが確認された。記事そのものの内容について、原稿依頼から印刷までの編集プロセスに非常に時間がかかり、タイムリーな話題が少ないとの意見が出た。この点に関して、現在注目されている研究を即紹介するニュース欄のようなものがあって良いのではという意見が出された。また投稿論文掲載数の少なさ、論文ページ数の規定についても問題提示・討議された。論文の長さについては賛否両論が出た。出版学会予算とのかねあいもあるため、平成11年度予算案で出版費の見直しが提案された。松本会長より、日本としての科学観・価値基準を打ち出すような会誌にしたいとの要望が出され、編集実行委員長の権限強化、各委員のさらなる努力により、内容重視の編集を行っていくことが確認された。年会時開催の平成11年度第1回運営委員会で選

出される次期編集実行委員長への申し送り事項となった。

3. 平成12年度年会開催候補地について（松本）

資料：議3

姫路工業大学の津田基之氏より立候補があり、第一候補として承認された。
年会時の運営委員会で正式に決定する。

注記：候補地側と運営委員会とで解釈の違いがあることが運営委員会後判明しました。
その経過は改めて松本会長名で連絡があります。

4. 学会会計繰越金の有効利用法について（中村）

資料：議4

平成9年度決算の次年度繰越金が2500万円弱あることについて、有効な利用法を議論していくよう経理担当委員からの提案があった。守りに入らない積極的な財産活用をその都度提案するよう、会長より各委員に要望が出された。

- ・税務上の問題が考えられるので、繰越金ではなく、たとえば「学会法人化準備金」として余剰金をプールする形をとる。ただし法人化についてはメリットよりもデメリットの方が圧倒的に多いとの理由から、積極的に進めることはしないことが確認された。

- ・独立した学会事務局の設立について、検討を始めることが確認された。

- ・年会準備金について、増額や（一部）返還義務免除などを取り入れて余裕のある年会運営を支援する。増額に関しては、年会委員長から予算案を提出してもらい、地域条件を考慮してその都度議論することとした。返還義務免除については、金額などをアンケート調査した上で、運営委員会で審議することとなった。

- ・会長室のプール額を増やし、啓蒙活動や若手の会・各支部活動に対する援助を積極的に行うことが確認された。

5. 広告業者について（藤吉）

資料：議5

広告業者の見直し問題について、業者は時々変えた方が競争原理が出て良いとの意見があった。現行のAE企画の対応の悪さは以前から指摘されており、次年会での様子を見て業者を変更するかどうか決めることが確認された。また年会と会誌の業者を分けることについて意見が出された。年会については年会委員長の裁量範囲であることが確認され、会誌については次回運営委員会で継続審議。

6. 学会ホームページの今後について（市川）

新学会HPのフォーラム欄を、支部活動や各委員会の電子会議場として積極的に活用

するよう要望が出された。また、カラー画像や映画など、会誌に掲載することが難しいコンテンツをHPに載せていく方針が確認された。

連絡事項：

次回運営委員会の日程について（松本）

平成10年10月2日（年会開催時）

時間・場所未定